

終戦六十五年を迎えて

足柄上郡支部 山崎 都里子（子）

戦没者 山崎 徳造

戦没地 旧満州

思い起こせば六十五年前、父は大工で母は身体が弱く寝て過ごすことが多かった中、昭和十九年七月二十日夜中に、突然役場の方が「山崎さん赤紙です。おめでとうございます。」と赤紙を受け取った。父は三十六才、母は四十才、私は九才の時のことです。その時、子供ながらに普通の様子と違い大変な事が起こるんだと思いました。

父の出征は七月二十二日、二日間しかない中、出発の朝、母が赤飯を炊いて食事中、父の膝に座る私に「お母さんは体が弱いから面倒頼むな」と言った父からの最後の言葉でした。父は世田谷の部隊に入隊し、藤沢駅で勤務していた人が届けてくれた名刺の裏に「元気で戦地へ発つ」とあり、二日目に戦地入りしたのを知った。近所の人達も大勢出征しましたが、一週間遅かった為内地勤務でした。

日増しに戦争もひどくなり食べる物も配給制度となり、父が開墾して作物を作っていたので母の体調の良い時は毎日山へ行き食糧を持って帰りました。母の具合が悪い時は私が二度、山へ向

かうのですが、小さい身体の私は片道一時間半かかり、おさつを取っても十本抱えるのがやっとでした。父との約束を守り母の為に頑張って登りました。

母は体調の良い時は父の代わりと言って義勇隊として山へ働きに行き、私は学校から帰るとバス会社で木炭の薪割りをして働きました。母は私を育てる為、自分ほろくな物も食わず着物を売って家計を助けました。やがて母は寝たきりになり、私も母の面倒を見る為学校へはほとんど行けなくなりました。母は私に父の公報が来たらこれを一緒に入れてくれと髪の毛と爪を渡されました。

私が十八才の昭和二十八年九月十八日母は亡くなり、まもなく生きて帰ってくると思っていた父の訃報が父の知人より入りました。昭和二十年八月十一日満州で戦死したと。母が亡くなった後の昭和二十八年九月二十五日付けで父の公報が入り、横浜の野毛山までお骨を受け取りに行くのと、骨壺の中に「隊長 山崎徳造」と書かれた板切れが入っていました。啞然とした中、涙がとまらずに松田まで帰ってきました。その中に母の髪の毛と爪を入れ、近所の方々にお願いし葬式を済ませました。

父に來た赤紙があと少し遅かったら。母が生きていたら。今で言う遺族年金を受け取り、母と少し楽な生活が出来たのではないかと思います。戦争があつた為、人一倍の苦勞がありました、今七十五才、体調もすぐれない日も多いですが女性部として頑張ってる毎日です。